

春秋・戦国文字分域における問題点

野原 将揮

これまで春秋・戦国時代の文字分域論をめぐる様々な研究がなされてきた。その結果、現在のところ「東西二系統説」と「五系統説」が主な分域論として考えられている。前者は王国維を代表とする研究者たちによって、後者は李学勤や何琳義らによって論じられてきた。他の研究者の分域論に多少の出入りはあるものの、基本的な部分については「東西二系統説」と「五系統説」に従っていると考えてよいだろう(注1)。一般的に「東西二系統説」と「五系統説」のどちらが優れているかはそれほど重要ではないが、特に文字論という立場から論じた場合には「東西二系統説」のほうが優れていると考えられている。これは大西克也氏の言うところのものである(注2.大西克也2002 p.86)。このように上述の二説が主要な分域論であるが、いまだ多くの問題が存在しているのが現状である。そのいくつかの問題を提起することでさらなる研究が可能になると感じ、今回その問題点について幾つか卑見を述べることにした。

① 素材の選択

今から三千年ほど前、殷王朝晩期には亀の甲羅や牛などの動物の骨に文字が刻まれた。時代は下って周代には青銅器が盛んに製造されるようになり、所謂金文が多く鑄込まれた。またこの他にも木簡・竹簡も殷王朝期にすでに存在したと考えられているが、その保存され難い性質上のため、いまだ発見されてはいない(注3)。甲骨は周知の如く卜いに使用されていたため、文字の対象は神であった。青銅器はもともと神や祖先に対する祭祀の際に使用された聖なる道具であったため、表記される文字もそのほとんどが神や祖先に向けて表記されたものであった。その後周王朝になり一部の人間を対象とする文字も増加し、結果的に春秋・戦国期には他の素材にも文字が表記されることとなった。(注4)それは社会がより複雑になったという一つの指標でもある(注5)。その理由は如何であれ、春秋・戦国時代に文字が表記された素材が急激に増加したことは現在の出土状況をみれば明らかなことである。

では一体どのような素材に文字が表記されたかという、いくつかに分類することが出来る(注6.何琳義1989 p.25～p.33)。何琳義(1989)は“青銅器文字、石刻文字、貨幣文字、璽印文字、陶器文字、木簡・竹簡文字、漆器文字、帛書”の8種に区分し、それぞれの項目で更に細分化し解説している。これだけ文字表記の素材が多種に亘るため、春秋・戦国期の文字比較には非常に慎重にならなければならない。それがここで言う「素材の選択」という問題点である。例えば、本来神聖的な性格を持つ青銅器文字と法律関係について表記された竹簡文字を比べれば、必ずそこに違いが生じるはずである(注7)。なぜならば、青銅器はその神聖的性格のために籀文(または籀文に近い字形)を用いて表記されている。それは秦系に限ったことではなく、多く地域でも同様に籀文(または籀文に近い字形)を用いて表記されている。一方木簡・竹簡を代表する楚簡には多くの簡略化された文字が表記されている。この二種類の素材の文字を比較して、違いが生じるのは当然のことである。これは素材の性格が文字字形に影響を与えているひとつの例である。では、鑄込まれた文字と刻まれた文字と墨で書かれた文字では果たして同じ字形になるであろうか。また刀銭のように長細い素材と石鼓のように広く大きい素材に表記された文字は同じ字形を持つだろうか。どちらも文字字形に違いが生じている。前者は文字表記の方法に違いがあり、後者は文字表記の素材に違いがある、それが文字の字形に多少の影響を与えていることは間違いない。そのことを考慮に入れないで雑に文字表記の素材を選択し比較することは適

当ではない。より正確な研究のためには同じ素材の文字を比較することが重要である。もちろん各地域での出土状況に左右されてしまうが、可能な範囲で公平な素材選択をする態度が望ましいのではないだろうか。

② 時代区分

春秋・戦国時代とは紀元前 720 年頃から秦が斉を滅ぼす紀元前 221 年までを指す。計 500 年という長い年月である。その中で文字は多くの変化を遂げた。そのため文字比較の際には時代区分が必要である。時代区分しないで全ての文字を採り上げ比較することは間違った結果を生み出すことにもなる。例えば春秋末期の A 地域と戦国末期の B 地域を比べるとしたら、必ずその結果に違いが生じることとなる。実際に「其」という字に注目し、時代区分の過程を経て比較してみると各地域での簡略化の進度など様々なことが見えてくる。中央に位置する三晋系では春秋末期にはすでに『侯馬盟書』の中で簡略化された文字が確認されている。一方、同じ東方地域に位置する斉系は戦国末期になって始めて簡略化された文字が確認されている。つまり春秋末期の文字で三晋系と斉系を比較した場合には、両者は異なった字形を用いていたと考えられ、戦国末期の文字で比較した場合には、両者とも簡略化された文字を用いていることから同じ系統に属すると看做されることとなる（注 8）。分域構造は以下の通り。

・春秋末期	秦系	:	中央地域	:	斉系
・戦国末期	秦系	:	東方地域（斉系も含まれる）		

このように細かな時代区分を行うことで様々なことが明らかになる。しかし、その過程を怠り、全ての文字を雑に採り上げてしまうと結果は異なったものになってしまうだろう。それを避けるためにも、可能な限り時代区分し、同年代の文字を比較することが重要である。

以上二つの問題点について挙げた。どちらも出土状況に依存せざるを得ない感があるが、出来るだけ公平な素材、文字選択する態度が望ましい。今後、春秋・戦国文字を研究する上で特に注意しておきたいことである。

注1. ここで言う基本的部分とは、秦系が籀文を用いており東方諸国は籀文の俗体を用いていたとする点。つまり籀文の正体と俗体との対立と考えることができる。「五系統説」は東方諸国をさらに幾つかの系統に分けている。

注2. 大西克也「戦国文字随想——系統論と統一の意義をめぐって」『中国出土資料研究』P85 第 6 号（2002 年 中国出土資料研究）
「東西二系統説」が字形に重点を置くのに対して、「五系統説」は文字が表記される素材に重きを置いている。また何琳義（1989 p.200）では“斉之凝重、燕之峻重、晋之劲利、楚之华丽、秦之刚健”というように表現しており、あまり字形という立場から分域を論じているようには見られない。

注3. 阿辻哲次『漢字の歴史』（1989 年 大修館書店 p.224～225）
甲骨文字、金文には「冊」字がすでに見られることから、殷代後期には木簡や竹簡が使われていたと考えられている。しかしながら木簡・竹簡は性質上あまり保存が効かなかったため、一体いつ頃から使われていたかは現在のところいまだ不明瞭である。

-
- 注4. 「大孟鼎」や「毛公鼎」を代表とする青銅器には長い銘文が表記され、それ以前の銘文と異なり一部身分の高い人物に対して表記され始めた。
- 注5. 河野六郎『文字論』（1994年 三省堂 p.8）
「文字の発明は文明の黎明を告げる指標のひとつである。およそいかなる人類であっても、人類である以上社会を作り言語を使用していない者はいまだかつて報告されたことはない。……その社会が間接的伝達の必要を感じずらいに複雑にならないと文字の必要は起こらないのである。」
- 注6. 何琳儀『戦国文字通論（訂補）』（1989年 中華書局）
- 注7. 青銅器文字は本来神聖の性格を持つため異体字が増加した春秋・戦国期においても、籀文（または籀文に近い字形）を用いて表記している。籀文を正体とすることがある。それに対して楚簡などに見られる文字は簡略化された文字が多い。そういった文字を正体に対して俗体と看做すことがある。
- 注8. 祝敏申 王国維「戦国時秦用籀文六国用古文説」疏証『中国古文字研究』p274（1999年第1期 吉林大学出版社）を参考した。「其」の分域構造について、春秋末期においては「東西二系統説」に当てはまらないようだ。このように時代区分の仕方によって、分域構造にも違いが生じることが分かる。また齊系の簡略化の進度の遅れも明らかである。東西二系統説を採るか否かは齊系を如何様に判断するか因るようだ。

<参考文献>

中国語文献

- 何琳儀 『戦国文字通論（訂補）』1989年 中華書局
李学勤 「戦国題銘概述」『文物』P50 1959年 文物出版社
王国維 「戦国時秦用籀文六国用古文説」『觀堂集林』P305 世界書局
祝敏申 王国維「戦国時秦用籀文六国古文説」疏証『中国古文字研究』P256 1999
第一期 吉林大学出版社

日本語文献

- 阿辻哲次 『漢字の歴史』 1989年 大修館書店
大西克也 「戦国文字随想——系統論と統一の意義をめぐって」『中国出土資料研究』
P85 第6号 2002年 中国出土資料研究
河野六郎 『文字論』1994年 三省堂
平勢隆朗 「戦国時代六国文字における「勺」等の略化について」『論集 中国古代
の文字と文化』P311 1999年 汲古書院